

国語 一一一	第五学年及び第六学年の内容 古文・漢文①	名前	年	組	番
-----------	-------------------------	----	---	---	---

取り組んだ日	月	日
--------	---	---

次の古文を声に出して読みましょう。

まくらのそうし
枕草子

せいしょうなごん
清少納言

はるはる 春はあけぼの。やうようやうよう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫むらさきだちたる雲くもの細ほそくたなびきたる。

なつなつ よるよる つきつき ころころ 夏は夜。月の頃はさらなり、闇やみもなほ、螢ひかりの多く飛びちがひたる。また、ただひと一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くゆもをかし。雨あめなど降ふるもをかし。

あきあき ゆうぐゆうぐ ゆうひゆうひ 秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと近ちかうなりたるに、鳥からすの寝どころへ行くいとて、三つ四つ、二つ三つなど飛び急いそぐさへあはれなり。まいて雁かりなどのつらねたるが、いと小ちいさく見ゆるは、いとをかし。日入ひいりはて

かぜかぜ おとおと むしむし ねね て、風の音、虫の音など、はたいうふべきにあらず。

ふゆふゆ 冬はつとめて。雪ゆきの降りたるはいふうべきにもあらず、霜しものいと白しろきも、またさらでもいと寒さむきに、火ひなど急いそぎおこして、炭すみも持わたて渡わたるも、いとつひきづきし。昼ひるになりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶ひおけの火ひも、白しろき灰はいがちになりてわろし。

国語 一一二	第五学年及び第六学年の内容 古文・漢文②	名前	年	組	番
-----------	-------------------------	----	---	---	---

取り組んだ日	月	日
--------	---	---

次の古文を声に出して読みましょう。

たけとりものがたり
竹取物語

さくしやふめい
作者不明

いま むかし たけとり おきな (う)
今は昔、竹取の翁といふものありけり。

のやま たけ と
野山にまじりて竹を取りつつ、

(ず) つか (い)
よろづのことに使ひけり。

な (ん) (い)
名をば、さぬきのみやつことなむいひける。

たけ なか
その竹の中に、

ひか たけ (ん) ひとすじ
もと光る竹なむ一筋ありける。

あやしがりて、

よ み
寄りて見るに、

つつ なかひか
筒の中光りたり。

み
それを見れば、

ずん ひと
三寸ばかりなる人、

(しゅう) (い)
いとうつくしうてゐたり。

国語 一一三	第五学年及び第六学年の内容 古文・漢文③	名前	年	組	番
-----------	-------------------------	----	---	---	---

取り組んだ日	月	日
--------	---	---

次の古文を声に出して読みましょう。

へいけものがたり
平家物語

さくしやふめい
作者不明

ぎおんしょうじや かね こえ
祇園精舎の鐘の聲、
しよぎようむじよう ひび
諸行無常の響きあり。
しやらそうじゆ はな いろ
沙羅双樹の花の色、
じようしやひつすい ことわり
盛者必衰の理をあらはす。
ひと ひさ
おごれる人も久しからず、
はる よ ゆめ
ただ春の夜の夢のごとし。
もの (い) ほろ
たけき者もつひには滅びぬ、
(え) かぜ まえ ちり おな
ひとへに風の前の塵に同じ。

つれづれぐさ
徒然草

けんこうほうし
兼好法師

つれづれなるままに、 ひぐ
日暮らし、 すずり
硯に向かひて、 (い)
こころ
心にうつりゆくよしなし事を、
そこはかとなく書きつくれば、
(お)
あやしうこそものぐるほしけれ。

国語 一一四	第五学年及び第六学年の内容 古文・漢文④	名前	年	組	番
-----------	-------------------------	----	---	---	---

取り組んだ日	月	日
--------	---	---

次の古文を声に出して読みましょう。

おくのほそ道 みち

まつおばしろう
松尾芭蕉

つきひ はくたい かかく
月日は百代の過客にして、行きこころ年もまた旅人なり。

ふね うえ しょうがい う
舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらえて老いを迎うる者は、

ひびたび たび こじん おお たび し
日々旅にして旅をすみかとす。古人も多く旅に死せるあり。

よ とし へんうん かぜ さそ ひょうはく おも
予も、いずれの年よりか、片雲の風に誘われて、漂泊の思い

やまず、海浜にさすらえて、

こぞ あき こうじょう はおく ふるす はら
去年の秋、江上の破屋にくもの古巢を払いて、

やや年も暮れ、春立てるかすみの空に、

しろかわ せきこ がみ もの こころ くる
白河の関越えんと、そぞろ神の物につきて心を狂わせ、

どうそじん まね と て
道祖神の招きにあいて、取るもの手につかず。

ひ やぶ お
もも引きの破れをつづり、かさの緒つけかえて、

さんり す まつしま つき こころ
三里にきゆう据ゆるより、松島の月まず心にかかりて、

す ひと ゆず さんぶう べつ うつ
住めるかたは人に譲りて、杉風が別しよに移るに、

くさ と す か よ いえ
草の戸も 住み替わる代ぞ ひなの家

おもてはつく はしら か お
面八句をいおりの柱に懸け置く。

国語 一一五	第五学年及び第六学年の内容 古文・漢文⑤	名前	年	組	番
-----------	-------------------------	----	---	---	---

取り組んだ日	月	日
--------	---	---

次の漢文を声に出して読みましょう。

春暁
しゅんぎやう

孟浩然
もうこうねん

春眠 曉を覚えず
しゅんみんあかつき おぼ

处处啼鳥を聞く
しよしよていちやう き

夜来風雨の声
やらいふうう こえ

花落つること知る多少
はな お し たしやう

絶句
ぜっく

杜甫
とほ

江碧にして鳥逾白く
かうみどり とりいよいよしろ

山青くして花然えんと欲す
やまあお はなも ほつ

今春 看又過ぐ
こんしゅんみすみすまたす

何れの日か是れ帰年ならん
いず ひ こ きねん

国語 二一六	第五学年及び第六学年の内容 古文・漢文⑥	名前	年	組	番
-----------	-------------------------	----	---	---	---

取り組んだ日	月	日
--------	---	---

次の漢文を声に出して読みましょう。

論語

聞一以知十

一を聞いて以って十を知る。

子曰温故而知新可以為師矣

子曰はく、

「故きを温めて新しきを知る、

以って師となるべし。」と。

※論語とは、中国の古代の思想家である孔子と、

その弟子たちの言ったことや行ったことを記録した書物。